研究報告

看護学生の保育所実習における学び

―記述からの分析―

矢野芳美*　永谷智恵　佐々木俊子

名寄市立大学保健福祉学部看護学科

キーワード：看護学生　保育所実習　小児看護

１．はじめに

保育所実習の意義や保育所実習における看護学生の学びについては先行研究で以下のように示されている。遠藤芳子（2004）らは、「学生が健康な子どもの実態を理解し、健康な子どもを肯定的にとらえることができるようになる」と述べている。東野充成（2005）らは、「学生の子どもに対する認知・認識の変容に保育園実習が一定の役割を果たす」という結果を述べている。一方で、杉村篤士（2015）らは、「保育園実習では健康な子どもの理解だけではなく、慢性疾患や障害をもつ子どもたちが在宅に帰ってから保育園でどのような生活をするのかを理解する貴重な機会にもなりうる」と述べている。小児看護学実習において保育所実習が看護学生の子どもを理解するための重要な位置づけにあることが考えられた。

少子社会の現在、身近に子どもと接する機会が少なくなった学生が多いため、子どもと直接接し、子どもを理解できるように保育所などの施設においての実習が行われる大学が増えている。

本学においても、健康な子どもの理解が深まることで、特殊な状況におかれた健康障害をもつ子どもの成長発達面や心理面への影響を認識し、個別性を考えた援助につながると考えて、2016 年度より保育所実習を取り入れた。

本学では保育所実習の目標を『子どもの成長・発達の特徴について理解できる』、『子どもの成長・発達に応じた日常生活の援助ができる』、『子どもを守り育てる環境や保護者と保育士との連携・相談について説明することができる』としている。看護学生はこれらの目標をもち、保育所で子どもと積極的に関わり、実習に取り組んでいる。

看護学生が保育所実習で子どもと関わり、保育士の子どもとの関わりを見学し、子どもをどのように理解したのか、実習終了レポートを基に内容を分析し明確にしたいと考えた。

用語の定義

子どもとは、0 から 6 歳までの乳幼児期の保育所に通う子どもを示し、学生とは看護を学ぶ大学生を示す。

２．研究の目的

看護学生が保育所実習で子どもと関わり、保育士の子どもとの関わりを見学し、子どもをどのように理解したのか、実習終了レポートを基に内容を分析し、学生の学びについて明らかにする。

３．研究方法

１）対象：A 大学看護学科 4 年生保育所実習終了後のレポート

（実習概要：保育所実習 2 日間、年少児クラスと年長児クラスで 1 日ずつ実習を実施している）

*責任著者　E-mail：yyano@nayoro.ac.jp

２）研究期間：2016 年 10 月～2017 年 3 月
３）分析方法：学生の保育所実習終了後に書いたレポートを精読し、保育所実習の 3 つの目標『子どもの成長発達の特徴について理解できる』、『子どもの成長発達に応じた日常生活の援助ができる』、『子どもを守り育てる環境や保護者と保育士との連携・相談について説明することができる』を視点とし、学生の実習中の場面から学びの場面を抽出し、サブカテゴリ―化、カテゴリー化と抽象度を上げていった。分析に当たっては、カテゴリー化の妥当性を高めるために小児看護学担当教員複数で検討を行った。

４．倫理にかかわる諸事項

研究対象者には、実習終了レポート内容を研究に用いること、研究の目的及び結果の公表、成績とは無関係であること、拒否権があり拒否しても不利益を被ることはなこと、方法、研究データの管理、個人情報の保護を口頭と書面で説明をし、承認を得た。なお、本研究は所属する大学の倫理委員会の承認を得て実施した。

５．結果

52 名全員からレポート使用の同意が得られ、分析対象とした。対象の特性は、看護学科 4 年生、女性 46 名、男性 6 名であった。

分析の結果、177 記録単位に分割され、意味内容から 6 のカテゴリーに分類された（表 1）。サブカテゴリ―を＜　＞で示し、カテゴリーを【　】で示す。以下、カテゴリーについて説明する。

保育士が子どもの年齢に合わせて言葉を変えて話し、理解できるようにしていた。＜保育士の子どもの年齢によりコミュニケーションの取り方を変える＞関わりをしていることを知った。子どもに注意するときは「ダメ」というだけでなく、なぜダメなのかしっかり説明していた。＜保育士は子どもが理解できる伝え方をする＞ことを学んでいた。そして、保育士の関わりがない場面でも子どもたちお互いで善悪を言い合い、考え話し合い、次回の行動につなぐことができることを学生は観ていた。＜子ども同士でも関わりながら成長している＞ことを学んでいた。これらのサブカテゴリ―からカテゴリー【人との関わりから成長している子どもを理解する】を抽出した。

1～2 歳クラスでは保育士が近くにいて子どもたちの基本的なコミュニケーションやルールを守れるように関る様子を観ていた。学生は＜ルールがあることがわかる年少児＞を知った。3 歳を過ぎると順番があることを伝えるときちんと順番を持つことができていて、きちんと理解している様子をみていた。学生は＜ルールを守ることを理解する年中児＞を知った。3～5 歳児になると 1 歳児と違いおもちゃの取り合いが少なく、喧嘩をせずにきちんと言葉で解決しようとする姿勢があることを観ていた。学生は＜問題を解決する力が育っている年長児＞を知った。学生は子どもたちが年齢を経ることで成長していることを理解していた。これらのサブカテゴリ―からカテゴリー【教えられて社会性の発達過程を理解する】を抽出した。

子どもが年長になると集団で生活するうえでリーダ―シップを取って率先して規則やルールを守ろうとする様子を観ていた。＜遊びの中で規則やルールを覚えていく＞ことを知った。学生は日常生活の援助の中で、1 歳児クラス、3～5 歳児クラスに分かれて学ぶことで子どもたちの個人、グループでの遊びに参加し、象徴遊びや構成遊びなどを観察していた。＜実際に年齢に伴う遊びの種類を遊びの場面から知る＞ことができていた。これらのサブカテゴリ―からカテゴリー【遊びが子どもの成長を高めることを理解する】を抽出した。

事前に机上での学びを実際に子どもたちと関わる中で結びつけることからイメージしていた発達段階の子どもと実際の子どもの発達段階の違いを観ていた。＜子どもの発達の違いを知る＞ことを実際の体験から知った。日常生活の行動から、同じ月齢の子どもでもできることに違いがあることを観ていた。＜同じ年齢

でも個人差がある＞ことを知った。保育士が子どもの身体機能の特徴を把握して子どもの遊びや日常生活を提供していることを観ていた。＜子どもの身体的特徴を把握する＞ことが子どもの理解につながることを知った。これらのサブカテゴリ―からカテゴリー【子ども１人ひとりをみることを理解する】を抽出した。

学生は 1～2 歳児では上手に使いこなせなかったスプーンやコップで飲み物を飲むことが 3 歳になるとほとんど援助を必要としなくなっている子どもを観ていた。＜子どもの食事の動作から発達段階を知る＞ことにつながることがわかった。学生は保育士が初めは子どもたちでやってもらい、うまくできない子には助言し、それでもできなければ一緒に行う流れを観ていた。＜生活の自律を考えた保育士の促し＞を行っていることを知った。これらのサブカテゴリ―からカテゴリー【生活動作の発達と促し方を理解する】を抽出した。

保育士が保護者を関わる中で子どもの情報を聞いていたことより、子どもの変化に気づいていたことを観ていた。＜保護者と共に子どもの健康を守る＞ことに繋がっていることを知った。散歩の時は道路側を保育士が歩き、交差点では車が来ないことを何度も確認して、注意していることをみていた。＜安全を守る環境を提供する＞ことを知った。保育所は子どもが楽しく、子どもの成長発達促すことのできる大切な場所であることを実習の中で観ていた。子どもの＜のびのびと成長できる環境を作る＞ことが大切な役割であることを学んでいた。これらのサブカテゴリ―からカテゴリー【保育士が保護者と共に安心して育つ環境を作ることを理解する】を抽出した。

表 1. 看護学生の保育所実習における学び

カテゴリー	サブカテゴリー　（コード数）	コード
１．人との関わりから成長している子どもを理解する	保育士は子どもの年齢によりコミュニケーションの取り方を変える(12)	・年齢に合わせて言葉を変えて話すことで、子どもたちが理解できるようにする必要があることを学んだ。 ・3 歳未満の子どもには言葉だけでなくイラストや動きも付けて説明することや復唱してもらっていた。
	保育士は子どもが理解できる伝え方をする（29）	・子どもに注意するときは「ダメ」というだけでなく、なぜダメなのかしっかり説明していた。 ・子どもに説明したり、怒ったりするときは子どものわかる表現を使い話していた。
	子ども同士でも関わりながら成長している（7）	・3 歳児でも他の子をしっかり気にかけることができること学んだ。 ・3～5 歳児の縦割り保育であるため、お姉ちゃんやお兄ちゃんが下の子どもの様子を気にかけている様子も見られた。
２．教えられて社会性の発達過程を理解する	ルールがあることがわかる年少児（8）	・1～2 歳クラスでは保育士さんが近くにいて子どもたちの基本的なコミュニケーションやルールを守れるように関わっていた。 ・他の子が遊んでいるものを取ったりすると、いけないことを言い聞かせる。
	ルールを守ることを理解する年中児（8）	・3 歳を過ぎると子どもたちがそれぞれルールを守ろうとする姿があり、ルールを守ることの習慣化ができていることに気づいた。 ・3 歳を過ぎると順番があることを伝えるときちんと順番を持つことができていて、きちんと理解していた。
	問題を解決する力が育っている年長児（5）	・2 人のトラブルは第三者(子ども)が二人の間に入ることで問題解決を行う様子が見られた。問題を解決する能力を養っていることがわかった。 ・3～5 歳児は 1 歳児と違いおもちゃの取り合いが少なく、喧嘩をせずにきちんと言葉で解決しようとする姿勢が伝わった。

３．遊びが子どもの成長を高めることを理解する	遊びの中で規則やルールを覚えていく（9）	・年長になると集団で生活するうえでリーダーシップを取って率先して規則やルールを守ろうとしていた。 ・子ども同士の喧嘩でも友達がなだめたり、関係調整したり、規則を学ぶことができていた。
	実際に年齢に伴う遊びの種類を遊びの場面から知る（12）	・１歳児クラスだと『いないいないばあ』などの感覚遊び、両手を上下に動かし喜んでいる姿から運動遊び、絵本の読み聞かせなどの受容遊びをする場面を見た。 ・3～5 歳クラス、ブロックをして遊ぶなど構成遊びかつ連合遊び、ままごとなどの象徴遊びかつ共同遊びをしている場面を見た。
４．子ども一人ひとりをみることを理解する	子どもの発達の違いを知る（6）	・１歳児クラスは自分ではうまく言えなくても、私たちの言っていることが理解できている。イメージでは１歳児は言葉をあまり理解できないという先入観を持っていた。 ・子どもたちを見て、事前に学んだことについて実際に子どもたちと関わる中で結びつけることができた。
	同じ年齢でも個人差がある（8）	・日常生活の行動も１年で大きさが出ていた、大人にとっての１年と子どもにとっての１年はとても大きいことを学んだ。 ・同じ年齢だからといって、みんなが同じことをできるわけではないため、それぞれの子どもたちの特徴や発達段階の違いをきちんと把握し、それに応じた手助けをしていくことが必要であることを学んだ。
	子どもの身体的特徴を把握する（3）	・遊びや日常生活を過ごす中で年齢や発達に応じた身体機能の特徴を把握することも重要であることを学んだ。
５．生活動作の発達と促し方を理解する	生活の自律を考えた保育士の促し（20）	・「さすがだな、かっこいい」などの声掛けを行うことで子どもたちのやる気を引き出していた。 ・初めは子どもたちでやってもらい、うまくできない子には助言し、それでもできなければ一緒にやっていた。
	子どもの食事の動作から発達段階を知る（5）	・１歳前後の子の食事のご飯の硬さを見て離乳食完了に向かっていることがわかった。 ・1～2 歳児では上手に使いこなせなかったスプーンやコップで飲み物を飲むことが 3 歳になるとほとんど援助を必要としなくなることがわかった。
６．保育士が保護者と共に安心して育つ環境を作ることを理解する	保護者と共に子どもの健康を守る（15）	・薬の飲ませ方では、自宅での習慣を聞き、可能な限り保育所でもその児に合わせた工夫を行っていた。 ・保育者から子どもの情報を聞いておくことで、子どもの変化に気づきやすくなっていた。
	安全を守る環境を提供する（17）	・1～2 歳児クラスではルールを理解することが難しいため、保育士の配置場所を工夫して、子どもたちの目の届く範囲に１名はいるようにして注意していることがわかった。 ・道路側を保育士が歩き、交差点では車が来ないことを何度も確認して注意していた。
	のびのびと成長できる環境を作る（13）	・子どもが楽しく、日々関わることを通して学ぶという面での保育所の役割の大きさを感じた。 ・子どもの成長発達に適した遊びができる環境が整えられており、保育所は子どもの成長発達促すことのできる大切な場所であることを学んだ。

６．考察

１）子どもの成長発達の学びについて

今回レポートから考えられた保育所実習における学生の学びは、成長発達し続けている子どもを保育の中で観察や関わりを持つことで子どもの成長発達の過程を通して理解できたことである。

子どもが危険な状況にいる場合、１～2 歳児のクラスでは、保育士は表情や簡単な表現で危険なことを伝え続けている。学生は何故危険かを理解してもらうことは難しいためと考えている。保育士は子どもが何度も危険なことを繰り返しても根気よく、子どものわかる伝え方で危険なことを伝えている。学生は保育士が伝え続けることで子どもがなぜ危険なのかを理解できるようになっていくことがわかっていったと考える。3～4 歳児クラスになると危険を理解し、行動できるようになること、5 歳児クラスになると、危険を理解した上で、子ども自身で危険を回避することができるようになることを認識している。学生はこれら 1～5 歳の子どもの行動から子どもの成長発達の過程の一連を学ぶことができると考えられる。

学生が子どもの成長発達を理解していく上で、【人との関わりから成長している子どもを理解する】、【教えられて社会性の発達過程を理解する】のカテゴリーより、保育士の子どもへの声掛け、促しなどの関わりを観察し、保育士の保育行動が子どもの成長発達を促す存在であることを捉えている。学生は机上で学習した成長発達段階を活かして保育所では、それぞれの年齢の子どもを観察し、成長・発達を評価していると思われる。学生は保育所で年齢の異なるクラスに入ることで、子どもの成長発達の過程を基礎知識と比較し、違いを理解している。1 歳だから年齢相応の成長発達ができるのではなく、子どもが成長発達できるように保育士の促しや導きが必要であることを学んでいる。子どもの成長発達は、子ども一人では進んでいくものではなく、周囲の大人が子どもの成長発達を促し、養護する必要がある。保育所においては、保育士が子どもの未熟さを補い、成長発達を促す存在である。学生は子どもの成長発達の過程で保育士の関わりが重要であることを学んでいると考えられる。

学生は保育所で年齢の異なるクラスに入ることで、子どもの言動の変化、保育士の声掛けの変化などを体験している。子どもは最初大人の助けが必要であったが、自分一人できるようになり、周囲の人と共にできるようになっていく成長発達の過程を理解している。

子ども同士の関わりがしっかりできている姿や異年齢のクラスに入ることで、年長児が年少児を気に掛け役割を果たそうとする様子をみて、子ども同士の関わりから子どもが成長している姿を捉え、子どもを理解していると考えられる。

保育士が行っている子どもとのコミュニケーションの取り方、イラストや動物を交えてわかりやすく伝えている姿を通して、成長発達に応じた伝え方を学んでいる。これは、子どもに「物の貸し借り」、「道路の歩き方」、「順番を守る」など、社会的規範や安全な行動の伝え方について、年齢によって保育士が近くで手本を示し教え、繰り返し、繰り返し伝える姿を捉えている。保育士が介入を多く必要とする発達段階から、子ども自身で解決できる能力が備わる段階までを観て、その状況を体験することで、子どもの社会性が育つ過程があることを理解していったと考えられる。

他の文献でも、子どもは遊びを通して社会性を身に付けている（高橋　2007）と述べられているように、学生は保育所実習の中で、子どもとの関わりのほとんどが遊びを通して体験していると考えられる。子どもの遊んでいる状況から年齢や性別、「模倣遊び」、「連合遊び」、「共同遊び」などの遊びの種類を学生が実際に観て、机上で学習した子どもの発達と照らし合わせて学んでいる。机上での学びに照らし遊びの種類を確認したり、一緒に遊ぶ中で子どもがリーダーシップを取ったり、ルールを守ろうとする様子、他児の喧嘩をなだめる様子から、遊びが子どもの成長を高めていることがわかり、子どもにとっての遊びの意義について理解していったと考えられる。

２）日常生活に必要な援助の学びについて

学生は保育所での集団の中でも【子ども一人ひとりをみることを理解する】を考えて、子どもを観

子どもが危険な状況にいる場合、１～2 歳児のクラスでは、保育士は表情や簡単な表現で危険なことを伝え続けている。学生は何故危険かを理解してもらうことは難しいためと考えている。保育士は子どもが何度も危険なことを繰り返しても根気よく、子どものわかる伝え方で危険なことを伝えている。学生は保育士が伝え続けることで子どもがなぜ危険なのかを理解できるようになっていくことがわかっていったと考える。3～4 歳児クラスになると危険を理解し、行動できるようになること、5 歳児クラスになると、危険を理解した上で、子ども自身で危険を回避することができるようになることを認識している。学生はこれら 1～5 歳の子どもの行動から子どもの成長発達の過程の一連を学ぶことができると考えられる。

学生が子どもの成長発達を理解していく上で、【人との関わりから成長している子どもを理解する】、【教えられて社会性の発達過程を理解する】のカテゴリーより、保育士の子どもへの声掛け、促しなどの関わりを観察し、保育士の保育行動が子どもの成長発達を促す存在であることを捉えている。学生は机上で学習した成長発達段階を活かして保育所では、それぞれの年齢の子どもを観察し、成長・発達を評価していると思われる。学生は保育所で年齢の異なるクラスに入ることで、子どもの成長発達の過程を基礎知識と比較し、違いを理解している。1 歳だから年齢相応の成長発達ができるのではなく、子どもが成長発達できるように保育士の促しや導きが必要であることを学んでいる。子どもの成長発達は、子ども一人では進んでいくものではなく、周囲の大人が子どもの成長発達を促し、養護する必要がある。保育所においては、保育士が子どもの未熟さを補い、成長発達を促す存在である。学生は子どもの成長発達の過程で保育士の関わりが重要であることを学んでいると考えられる。

学生は保育所で年齢の異なるクラスに入ることで、子どもの言動の変化、保育士の声掛けの変化などを体験している。子どもは最初大人の助けが必要であったが、自分一人できるようになり、周囲の人と共にできるようになっていく成長発達の過程を理解している。

子ども同士の関わりがしっかりできている姿や異年齢のクラスに入ることで、年長児が年少児を気に掛け役割を果たそうとする様子をみて、子ども同士の関わりから子どもが成長している姿を捉え、子どもを理解していると考えられる。

保育士が行っている子どもとのコミュニケーションの取り方、イラストや動物を交えてわかりやすく伝えている姿を通して、成長発達に応じた伝え方を学んでいる。これは、子どもに「物の貸し借り」、「道路の歩き方」、「順番を守る」など、社会的規範や安全な行動の伝え方について、年齢によって保育士が近くで手本を示し教え、繰り返し、繰り返し伝える姿を捉えている。保育士が介入を多く必要とする発達段階から、子ども自身で解決できる能力が備わる段階までを観て、その状況を体験することで、子どもの社会性が育つ過程があることを理解していったと考えられる。

他の文献でも、子どもは遊びを通して社会性を身に付けている（高橋　2007）と述べられているように、学生は保育所実習の中で、子どもとの関わりのほとんどが遊びを通して体験していると考えられる。子どもの遊んでいる状況から年齢や性別、「模倣遊び」、「連合遊び」、「共同遊び」などの遊びの種類を学生が実際に観て、机上で学習した子どもの発達と照らし合わせて学んでいる。机上での学びに照らし遊びの種類を確認したり、一緒に遊ぶ中で子どもがリーダーシップを取ったり、ルールを守ろうとする様子、他児の喧嘩をなだめる様子から、遊びが子どもの成長を高めていることがわかり、子どもにとっての遊びの意義について理解していったと考えられる。

２）日常生活に必要な援助の学びについて

学生は保育所での集団の中でも【子ども一人ひとりをみることを理解する】を考えて、子どもを観

子どもと関わりながら子どもの理解を深めることを繰り返し学んでいることが推測される。学生は子どもの生活を通して成長・発達過程のどの時点にいるのかを考え、子どもにどのような関わりが必要かも考え行動していると考えられる。

保育所実習から「子どもの成長発達の過程を子どもの保育の中で理解する」、「子どもとの関わり方について保育士を通して学んでいる」ことを学び、子どもを理解していったと考えられる。

小児看護学実習における保育所実習の意義として、目標の『子どもの成長・発達の特徴について理解できる』、『子どもの成長発達に応じた日常生活の援助ができる』、『子どもを守り育てる環境や保護者と保育士との連携・相談について説明することができる』のことであり、以上の事から保育所実習は子どもを理解できる小児看護学実習として重要な位置づけにあることが明らかにされた。

【文献】

遠藤芳子，後藤順子：小児看護学(幼稚園)実習の有効性の検討―実習前後の看護学生の子ども観と実習のとらえ方の変化から―，山形保健医療研究，7，33-40，2004

東野充成他：保育園実習に見る看護学生の子ども観，九州大学医学部保健学科紀要，5，77-86，2005

糸井志津乃，松田葉子：保育園における小児看護学実習での学生の学習体験，目白大学保健科学研究，3，81-87，2010

岩田みどり：保育所実習における学習効果―保育士からの学びの明確化―，新潟医療福祉雑誌，9(2)，69 - 73，2002

永田真弓他：幼稚園実習における看護学生の学習経験の検討―学習内容の特性と小児看護学実習における意義―，広大保健学ジャーナル，2，64 - 71，2002

中野幸子：保育実習で保育士が求め学生が学ぶ子どもの捉え方や関わり方，日本看護学会抄録集 小児看護,40，213，2009

杉村篤士他：小児看護学における保育園実習の学習効果に関する文献検討，横浜看護学雑誌，8(1)，57-62，2015

高橋衣：小児看護学実習における幼稚園・保育園実習の有効性の検討 ―幼稚園・保育園実習前後の子ども観の比較から―，足利短期大学研究紀要，27，59 - 66，2007

田中浩二：保育現場のリスクマネジメント，中央法規，2017

吉川一枝他：保育園実習における学習内容に関する検討，日本赤十字北海道看護大学紀要，3,63 - 66，2003